

朝夷巡嶋記

第六編

卷一

13

704

26



門 卷 26
號 404

曲亭主人著 本編五身

朝夷巡島記

朝夷巡島記

丁亥發兌
參樂字號

歌川豐廣画 文金堂梓

明治三十八年
十月九日

朝夷巡島記第六編序

原平、義秀、事實、東鑑所載、不過於小壺角、
觥、及妙戲海潮、捕離鱷、三隻、事與建保血、
戰、破門拉敵、奮勇無前、最後沉舟、以走安、
房、事也。是以坊間、冗籍、唯神其勇力、而不、
知其智術、亦捷于世、至甚者、則云、義秀身、
後於冥府、威服閻羅、奴僕冥官、其言可以、
悅閻里小兒、而不足為士君子道也。予嘗、
以謂義盛八子、而義秀為白眉渠、其勇悍、

月夜六編卷一

非啻與漢樊噲為伯仲其智略亦將有似
 張子房何者彼敗軍中善脫難免而不使
 敵終身知其存亡當時苟以報怨雪恥之
 志則不與父兄俱死也宜惜乎時不至終
 漂泊海島而鴻雁之傳信焉者無矣是故
 不遇於北條氏以聘之辱則勝乎田橫辭
 漢伏劍但以其事蹟無所攷識者為千載
 遺憾此予之所以戲著巡島記也初發研
 之際予約于書肆文全堂是書刊衍至三
 十卷則可以結局也爾後六續編簡冊垂
 五六然而腹稿未吐盡者幾過半矣光陰
 難追又費幾日焉書肆之不飽利以編述
 不速為恨予乃倦于筆研獨悔是著不易
 果彼我急寬莫奈之何敢思欲因前約輟
 筆於是編上文全堂允之否未遑告是意本
 編五卷手稿成即便是為序

文政九年仲殊之日書于神田廟東著作
 堂南檐木犀花陰 簞笠漁隱



朝夷巡嶋記全傳後輯第六編總目錄

第四十九條 そのみほのおんき 諏訪嶺豺狼 とりのまのひひ 照射山鷲

第五十條 やまひるまのひらけ 莊官林淫婦 やまひるまのひらけ 山蛭橋殘獸

第五十一條 ののむらりのりちん 瀆筵粉餅配 かきまのあひむくひ 陰惠倒應報

第五十二條 おれなきのとくり 後花十回案 なまのひとよ 淚種一節籬

第五十三條 ちかたのまのり 家廟投入花 かむのたのたの 弟迎常葉枝

第五十四條 まのまのひのり 濱角舐祿物 こつれのまのり 小壺海巨鱈

第五十五條 おののまのり 由井濱奇貨 まけんかきのとく 執權邸交易

第五十六條 うたもりのり 浮雲禳猛齋 まとのむら 團坐席夢話

第五十七條 せきぎのり 節義守戸浦 せんまのり 損益頭髻塚

第五十八條 あまのり 天妙女柱乞 さけのり 勇悍人貨獵

本編五卷總目錄終右第四十九第五十兩條雖既出
前輯總目錄中而釐為本編第一卷因重出以充卷數



兄弟角力不柔
 不剛勇名雖惜
 恥似鬪墻愈空

和わ田だ新しん左さ衛ゑ門もん尉ゐ

常盛

芋田乃
 陀忠

北條時政之

後妻牧之方



長舌危國
 平勃未誅
 良人非噲
 汝似呂須

田高

小阪太郎

北條相摸以義時

你是陪
臣護執
國命若
微泰時
九世何
盛回



内寵
勿憑
命有薄
厚玉石
猶焚
氷山豈久

比企弥四郎
能久



前報未盡
餘殃相同
祖孫終處
在浴室中

廣

不

源二位賴家卿



二世暗弱
君臣亂離

秦有

闇樂

景盛

似之

廣

安達左衛門景盛



その書は毎編五卷あるを、景表小第五編と綴り、日書肆を時後とて、鏤果ご
 一巻遣く、釐度四巻と發取り、つれが今この編より送打を割入れて必六巻よ
 り、又書肆の好は任く、つれも五巻鏤出さる、九編を送せり、一巻を
 補ふりのさ故、本編へ楮敷の例より倍を數ざと二百四十餘頁をかゑり、内五卷
 りとのとも、省官例の六巻も、敵入秋とて所為をけり、右小見を出像の中を、牧子ハ初
 編と五編と出く、編の端は、その簡端は、画のせ、景表編出像の拾遺、且安達
 景盛と比企弥四郎能久ハ第七編ハ出さる、并ハ頼家の修善寺浴室中、圖の
 如く、皆後編の趣向を、今この如く見せり、省官を、この画より、第七編ハ初め、
 ことあらめ、と想像せられ、一端とてある、その室咲の桃楼と冬より、朝草類る、
 姓氏追加、小阪太郎、富部五郎、和留郎義氏、四郎義直、五郎義重、六郎義信、
 七郎秀盛、八郎義國、右兵衛尉朝盛、安達景盛、比企能久、
 草賊鼠乃木表平、芋田陀忠、
 通計一十三名、崖略、併姓氏目終

朝夷巡嶋記全傳第六編卷之一

東都 曲亭主人編輯

後輯第四十九 諏訪嶺の材狼 照射山の狒々

さて、そののち、四月の中浣平泉の柵中、極光伸
 案了前、勸再說朝夷三郎義秀ハ、四月の中浣平泉の柵中、極光伸
 義邦ハ、辭、別れ、只ひとり、越路を投ぐ、程は追留らる、と、
 足小信、つとの順逆、拘らる、又遠近を、擇ば、いづの日に、
 寶川、越後の八田中、入り、これより、福取焼山、綱木、天満津川の驛、
 四里あり、山路を、来、角嶋と唱へ、禰村を過る、程は前面、一座の大山あり、
 名、越の諏訪嶺、あり、時、四月の下浣、山ハ、半面雪を流し、樹木の若葉ハ、
 萌盡さ、
 輕寒、輕暖、他州の二月、
 似、
 日、
 長、
 獨、
 行、
 言、
 葉、
 敵、

あつちをわれば飽と死の睡眠を催し餓れば疲労て歩果敢たこの日も下晡
 多し頻に物の欲しくなりし風と吹下は山風の慙ハせんとも来て酒の
 香芬と鼻入りしをいと珍らうも好し所小忽地目覚る心地しく但見れども
 ての村盡処は只獨屋の酒店ありを朽傾たる茅の檐小高く一朶の杉の葉と
 掛るハ彼味酒の三輪ありとのみ帘の謎あべし門邊は猛犬ハをうほ酒の
 活むとお母く一両脚の尻掛床ハ寂寥としく憩めぬのあ突立たる土蔵を
 薪竭灰冷く鍋の中より湯氣絶る義秀ハ性としく酒肉を食ふ
 ものあれども長途の疲労を息へん為且十分の酒氣を帯は彼大山を
 踰るわんともひふれが突立たる鐵棒と酒店の門の片隅は倚りて
 菅笠の細解もあは誰と在らばやと呼めり床ハ尻どうも掛れぬ家
 まうしわん奥のくまう一個の老人遠く出迎へく客人酒を用ひ秋五夕をり
 り也節侍ん飲有ハ豆腐の石焼と山獨活の酢味噌茹のわりのづれをうめさる
 と問れ義秀も微笑有ハ兩種共より多まれば十分醉んと欲せ五夕
 ちる酒何せん少むを向て疾蹄をせとハ斑ある齒を顯し
 うち笑ひ客人ハ他郷の料と五夕をりともあへどこれ尙せ當州をくこの片口
 多滋養むを多と五夕と唱えぬれば是他州の酒五合この地方の五夕と且
 多家の酒ハ茶華瀧あれども中汲む酒氣烈しく味ハ醇厚し下火
 人を研をればその醒と究め遅りこの故よふ名も上戸ありとも獨酌
 しく五夕の酒の上を過はると稀にされはる兒國風の曲子も酔りてをり五
 夕の酒小一合過ぎはる解人と歌へるを多と誇るは答る間も意もや
 柴折焼く豆腐を煮入酒を盪り彼酢味噌茹も共は元々といと垢染る
 塗打敷も安排して来て義秀も羞るを義秀をしく笑坪入りて酒四表

八表と語りせむ件こゝろの五夕ごせきを傾盡かたむすして再び五夕ごせきの酒さけを論ろんせむのまも喫くせむのま
せふこれも盡つくしこれも程ほどは時とき解と求もと食を雞をの檐の下もとかへり来きに
らまこれ義秀よしひではあつこれつこれ外ほか面のを瞻あや仰まふ日ひハ山やま披のひ没ひえんとこれはありこれありこれあや

時ときを殺ころしこれむこれとむこれりこれて遠とほく腰こしを著つけ貫くわん緒そとこれふこれ解とけこれむこれに
酒さけの賣うり取とりこれせこれ脚あし絆をの紐ひもを締あ更まとこれ左ひだりより管くわん笠かさ引ひ提ひきこれ嶺のを望のぞみこれてこれおこれはこれば

あつこれトこれハ急きゆうに掖お苗のめ客きやく人にん暮くらふこれ程ほどもなこれ今いまよりこれと數た里りの嶺のをいこれてこれ越こえん
のこれあつこれ傳つたへこれふこれ近ちか曾さ彼かの諏す訪ぼうの嶺の中ちゆうを野のの狼の群ぐんむこれ人にんを害がいひこれるこれと限かぎり

尺ひら直ちとこれのこれとこれ獨ひとりりこれハ恙やふこれのこれ稀まれありこれとこれ五ご七しち人にんの同どうがこれとこれ俟まちほこれくこれ嶺のを越こがこれ加か捕とら
むこれあこれ比ひよりこれ近ちかき山やま里りありこれ女子じよどもどものこれとこれ六むねねふこれ失しつこれとこれありこれとこれのこれ程ほどを密ひそ

夫このは誘こ引ひきこれれこれかこれんこれとこれ彼かの此この隈かたありこれ索さくねねいこれとこれのこれ跡あとありこれとこれのこれ女子じよをねね
邁まえこれとこれとこれ也なり男子なんもどもわらぬこれ寔じは怪あやしこれなこれりこれとこれ人にんもどもは我われもども誰たれをこれ誰たれをこれせこれらこれぬこれと

ちこれ比ひよりこれ彼かの山やまハ怪あや獸しよ二に頭かぶ極ごくとこれ必かなら北きたとこれ杜ととこれかこれんこれ好このとこれ人にん畜ちゆうの血ちゆうを吸すふこれ
女子じよハ実じ柔じゆのこれやこれ血ちゆうのこれとこれ多おほくこれのこれおこれれこれがこれ這は奴の男子なんおこれハ目めとこれけこれをこれ女子じよとこれ捉とらむこれ

又またりこれとこれ女子じよハ限かぎりこれとこれハ男子なんとこれとこれ油あぶら割わりせこれバ可この惜あ命いのちとこれ夫このとこれとこれこれこれらの風かぜ面めん
おこれれこれはこれ客きやく人にん今いまよりこれ夜よをこれれこれハ彼かの大たい山さんを越こへこれハ幸さいひこれハ狼の牙のをこれ脱だつこれとこれありこれと

又また彼かの獸しよハ腹はらのこれまこれんこれあこれりこれ山やまのこれおこれろこれ行ゆ地ちの里りおこれハ人にん煙えんもどもをこれ枉かぐこれ今いま宵よはこれ
宿しゆくハ曉あけとこれ正ただ首しゆうは諫いをこれ門の片かた隅ぐもをこれ彼かの鐵てつ棒ぼうをこれえこれハ只ただ九く膚ぶをこれ朽くちこれたこれるこれと

皇みかど土とハ生なままこれたこれくこれ天あま意いハ随したがひこれのこれハ欲ほ寡くわしくこれせこれらこれとこれかこれくこれ心こゝろ丹に田でんのこれ下もとはこれおこれろこれ
要あ時ときもども内うちハ動うごくこれハ物もの亦また外ほかよりこれ害がいをこれかこれハ人にんハ獸しよをこれ怕おそむこれとこれもどもはこれ何なにもどもあこれらこれぬこれと

さこれ怪あや談だんとこれあこれりこれとこれハ客きやくをこれ權けんしこれてこれ魚うをこれんとこれ欲ほむこれとこれもども世よ渡わたるこれのこれ方かた便べんをこれとこれこれこれハ路みちをこれ
貪ありこれとこれ旅りょのこれのこれ不ふあこれらこれれこれもども想おもひこれくこれ酒さけをこれ喫くとこれとこれ轉くるくこれ嶺のを越こへこれ人にん爲なるこれとこれあこれらこれもども件けんの

怪談は驚されくあふ歌のこの快解とついでん。あやな雑談せほもあれといふこと
 あやハ頼めくあふの腹立之眼を睜りしれハ好意を云云といひあふの腹立之も
 登著心阿容々々として立返の宿賃せよか勸解ゆいよと咳くと耳もあふ義秀ハ
 袖を拂めく衝とつて鐵棒をわたり突立邁して果ていふことかハ忍地日ハ暮
 たり山腹ハ他所も入相の早か比四月廿日あり三四日といひ鳥夜ハ豫で準備の
 續松火を鑽移し道を燭と鐵棒右もあふ諷訪嶺ハ攀登ふ登る人品
 絶る深山の夜ハの寂寥山氣肌膚を犯し夜風面を撲り大く巖石路ハ
 横り樹根ハ足を取らふ松やり目もあふハ星の光耳ハ安めハ谷河の碎けて
 落しと凄下義秀匹夫の勇者かぬハ武藝ハ誇り膂力を頼と漫よの身の
 危殆を忘れらふわなむも既ハ十分の酒氣を帯てハ進と退くとの頼ハ年少

これハ血氣強くてか夜行とせあふ。さ程ハ義秀ハ筆腸山又山と或ハ
 登り或ハ降り往來て今ハも巔ハ近つたゆんともハ二十四日の月ハ空ハ儂ハ
 子の半あふ。この比の夜の短くとも巔ハ登著るハ既ハ夜半を過せハ不知
 業内ハ故とことあふの空ハ晴之隈ハ月ハ送られハ是より。又
 蕉火を續更にあら頼りハ焦燥ハ又一段と登果之樹拉深る処ハ至れば
 忽然とく狼の声高く響き義秀これと物もせげをさふ向てや程
 左方ハ山卯木のさくハ戦とまを。と云ハ狼のその数九六七頭前後左右に
 頭れど。真圓より圍り義秀もあふ此ハ騷ハ夜前直よつのおも狼と
 跳越つ邁んと。後方ハ一隻の狼驤の如く走蕘り義秀ハ腓腸と噬
 例えと近つて程ハ義秀これと凡目ハ足と飛と礮と蹴と踢られて些
 怯む処ハ風標の如く身を振えく鐵棒推取延つ眉間と下と聲ハ一声

あつひに 平張伏く死せり。その際、前より狼又後より走菟とて義秀を
 苦しめ、身と交り、肉を食ひ、骨を砕き、打れり。亦筋骨砕け、骨を食ひ、残る五頭の狼、
 為体、路を求難く、彼此へ遠巡をせし程、義秀逃るべしと叫び、四方小難
 立れば、狼は、避易く、逃れ、脱走せしむ。忽ち地人の、どくふ立る、腕の、
 明見、さる水刃を、抜きて、撃んとし、義秀これと信じて、原米、癖者、とて、漏
 へせしと、棒より、直ぐ、大喝、一声、嘯と、菟、バ勢、以、千鈞、の石、を、
 異、狼、狼、み、瞬、間、骨、も、續、く、は、殺、され、一、頭、送、り、
 落ち、れ、戦、慄、れ、腰、も、折、れ、と、抗、声、を、あ、げ、て、克、と、叫、ぶ、義、秀
 呵、と、も、笑、く、鐵、棒、右、も、つ、立、汝、ホ、この、假、狼、愚、民、を、惑、し、旅、人、を、救、く、
 その、罪、を、造、り、も、憶、め、不、是、汝、ホ、山、賊、の、と、拙、り、め、この、餘、の、同、類、を、
 頭、領、辛、く、奴、ら、に、伏、せ、り、首、伏、せ、り、と、責、問、ハ、山、豪、ハ、平、伏、く、頭、を、
 擡、く、さ、い、つ、も、及、せ、め、い、ん、其、ホ、平、泉、の、經、任、が、大、將、ハ、四、天、王、と、呼、れ、
 重、連、が、隊、兵、の、經、任、滅、び、り、と、死、矢、藤、五、は、後、を、興、と、逐、電、を、う、り、又
 夫、藤、五、は、も、捨、れ、れ、今、ハ、頭、領、も、い、と、又、この、外、同、類、や、あ、る、夫、藤、五、ハ、曩、に
 經、任、と、見、絶、く、厨、川、の、柵、に、赴、け、彼、柵、の、大、將、を、象、子、彈、平、太、負、持、と、詐、計、
 軍、要、金、三、十、兩、と、掠、奪、り、其、ホ、と、ぬ、越、前、の、三、國、邊、に、遊、女、們、を、聚
 聚、合、て、酒、宴、遊、興、夜、を、日、に、継、る、樂、い、ま、央、の、銀、の、金、と、沙、の、く、用、散、を、
 しく、疑、れ、忽、ち、地、人、に、密、訴、せ、り、遂、に、守、護、を、指、向、ら、れ、捕、ら、る、兵、は、不、意、
 撃、つ、と、且、く、防、戦、の、ろ、ろ、克、之、も、あ、る、壁、を、毀、屏、を、棄、て、金、散、を、あり
 一、より、夫、藤、五、が、往、方、と、あ、る、其、ホ、一、隊、七、人、當、國、に、逃、れ、来、る、の、山、林、を、所、住、
 せ、し、近、曾、の、山、を、怪、物、夜、に、と、く、人、と、取、交、わ、る、風、吹、あり、と、猛、り、思、起、
 しく、七、人、齊、く、狼、の、皮、を、被、た、く、夜、初、を、遮、り、里、人、旅、客、と、追、切、く、露、命、を、

捕の沙汰を脱ぐ跡を隠す便ありとち相譚ひふまけをさす大人ハ
 一人當千鬼神を欺く本吏あるを夢もも知らぬ獨りぞと侮るも
 忽地命を預ける六人の名ハ云云あり某ハ前乃木の哀平と名づるもの
 犯するその罪萬死に當れども願ふ慈眼佛意を乞ふ免れんと勸解する
 義秀笑み冷笑ひ原米は亦ハ彼鐵盾矢藤五ヶ隊下の小賊あり秋は賊
 將經任する肩ともまるとあり然るに況矢藤五と名づる彼奴ハ
 且くも天誅は漏せしむる送恨あれば汝ハ教を盡しと我百人聚合せしめ
 この小唾く虫を取らぬと易う勸解されども一箇と免れなれば
 とも窮獸既ハ尾と垂く媚て命を乞ふとたは獨夫もこれを殺さば今宵ハ
 汝ハ首と目く軀は預めせん逃とも誅せしむると又天意は任まらん
 近邊の藤蔓引ぬき縛り棋兒のそと牽き老る松ハ
 繋ぐわら陰霾る雲月と隠し膝朥と多隨ハ夏ハ海寒北山風のぞ腥く
 肌膚を徹しと毛骨栗立つ程とわれを怪しげなる二頭の獸突然と走來
 六箇の賊の痰口より流れる血を吸く共ハ餘念ハたが如し義秀こそと
 透しる酒屋のあり云云ハ河語とあり多怪獸ハ是をわれ先物者を
 鐵棒とぞと取揚ぐ窺近の死邪と声けく先ハ進し一獸を徹塵はれと
 射て長庚ありも輝る義秀ハ一の棒を毀損しと送恨堪は再ハ間近
 進むと互落く頭短ハ颯と引く程もあはれ一獸忽然と後方立く獲鬼
 とて義秀をさすんて鐵棒霎時止る輪々々と風車の遠く似る振

近邊の藤蔓引ぬき縛り棋兒のそと牽き老る松ハ
 繋ぐわら陰霾る雲月と隠し膝朥と多隨ハ夏ハ海寒北山風のぞ腥く
 肌膚を徹しと毛骨栗立つ程とわれを怪しげなる二頭の獸突然と走來
 六箇の賊の痰口より流れる血を吸く共ハ餘念ハたが如し義秀こそと
 透しる酒屋のあり云云ハ河語とあり多怪獸ハ是をわれ先物者を
 鐵棒とぞと取揚ぐ窺近の死邪と声けく先ハ進し一獸を徹塵はれと
 射て長庚ありも輝る義秀ハ一の棒を毀損しと送恨堪は再ハ間近
 進むと互落く頭短ハ颯と引く程もあはれ一獸忽然と後方立く獲鬼
 とて義秀をさすんて鐵棒霎時止る輪々々と風車の遠く似る振

廻り前後は些もよき著けを進退不測の修煉の妙奥精神まろく如く
 鬼を拉ぐ槍法は怪しむ所歎かぬやうな共侶は逃んとひつと遣も
 過ぎた追携は些し後れ一獣の腸腹夫と打折け下声叫ぶ声と俱形
 威まわりのを義秀はもの一頭も均等苗さうらうと巧ましく多も雲
 かれせし月さぬおふ不知案内の山中を追ふともいそぐ及ぶを多ひ文
 徐々と奮の丸は退た松の株は尻も掛く且く汗と納れとももの樹の幹
 繫れら荒乃木の表平ハ怪獣の光景と義秀が疾働は我を忘れて酔
 如く呆惑あつたのわう浩然と峰上を隔く咄と揚がる閑声の始は成て果
 その勢九百人許りかく照らば蕉火の足さあられつ隠れ漸くは近
 義秀遙は倍と多く意あつてもぬぬのそをまのまこの山賊の支黨放
 ぶ狐狸の所為欲をまわれかともわれ這奴何ぞりのまをさるあひの

引よて塵をくくられんと獨あつた領を衝と身を起こして件の棒を小腰
 扱と立ちうる且して被衆人ハ間近くある隨は真先は進一ハ是れ一個の武士
 ありる年齢ハ五十のう人と三四ありあつたうんは藤子野装束と腰小
 朱鞋の両刀をのりげは跨ぐ左も右も重藤の弓は握太を携はる背は捕
 箭の籠を負やうり相後み者共ハ或ハ弓箭或ハ竹戟及列卒繩と要ふて
 みね後れと進と下武士ハ義秀をどう由かどうあつたやうて其処を
 什麼何人とも向ハ義秀声高やうこれハ津川の莊官やう四山益丸郎高益と
 人をめと問えされ此も擬議せられ津川の莊官やう四山益丸郎高益と
 呼ぶもの之邊曾この山は夥の狼群やう人と害を多うり又怪獣ありて女子を
 捉るとやえし此彼とも捕獲さんとも里人捕夫夥やう今朝やう深く
 入りし捕さうしハ照射山獲物やう二輕の家路とさうて還るおらう園



五七九

五七九



誣訪嶺
義秀七賊二
獸を退治す

朝夷一編卷一

徳川家

物と獲りて。和玉ハ何ホの故小夜も。山と越。と再問ハ義秀を吞て
 れハ陸奥より越後を過りて越中へ赴く。角鳴は宿る。道を會
 へ。この山路は日暮。今更些。先の時。此の如く。狼は打掛。こ
 山賊六人を打殺し。一賊を縛置り。その折怪獸あり。二頭。忽然と走。死骸の
 鮮血を吸ひ。又これをも撃んと。疾と飛鳥の如く。猛と虎狼。小
 路。肩犬を去。打。倒れ。逃。死
 路。追ひ。索。草賊の未歴を責問。小箇様々々の奴原
 果。なく。告。金九郎。果。驚。且。飲。後。者
 蕉火を抗。徒。果。大。根の皮を被。其
 共。六人。肉破。骨碎。死骸。算。糸。又一人。藤。松の
 幹。敷。尺。大。今。峯。生血を引

たる。金九郎。光景。驚。左。右。指。
 義秀。凡。眼。明。世。豪傑。認。殆。失。頭。海容
 老。和。殿。一。臂。の。助。山。賊。悉。誅。伐。一。隻。の。怪
 獸。獲。事。既。了。其。今。朝。獵。暮。真。夜。中。及。眼。小
 遠。の。の。空。と。還。今。上。怪。獸。走。彼。射。道。と
 小。程。忽。地。仆。炬。光。就。熟。視。れ。奇。怪。の。形。状。の。肩。犬。あり
 腋。下。も。打。破。れ。骨。碎。け。血。の。流。原。來。の。残。を。驚。け。何。が
 撃。り。けん。の。入。を。捉。怪。物。を。一。尚。甦。生。ま。り。と。人。と。を
 斬。短。刀。を。吐。を。深。く。刺。入。を。皮。肉。堅。く。受。辛。く。刀。を
 刺。串。足。を。縛。材。掛。六。箇。の。里。人。早。し。れ。ハ。和。殿。撃。れ。る
 彼。猛。獸。疑。は。れ。後。方。を。入。り。物。これ。へ。と

下知されハ里人ハ八件の獸をほり近ク昇りまゝ又一兩ハ蕉火を振照しく左
 右ふ立ち當下義秀ハ徐に進みてこれぞんふ獸の惣身四尺はあまのく面を
 画す夜又のどく眼圓ハ唇厚ク牙尖しく口の大地を顔に連りて耳の下に
 及べり況又長爪ハ劍のどく赤黒毛ハ赤熊に似て頭毛は長く蓬を乱れ尻
 おも垂り死しハ肉眼を閉ぢ志を遂む悪相ハ怪しむをも疎義秀ハと
 さぬかゝる猶つゞくとて程ハ盆九郎も又進みより某社ありしハ狢を好て
 山又山ふり入ると屢ありしハあまのく獸とんん何との物やんと問ハ義秀
 沈吟しとこれハ狢の種類あべ嘗聞唐山劉宋の建武年中
 鷓鴣々の雌雄二頭と進らせしとありるを鷓鴣々又これを狢とて國俗の山標と
 呼做せしもの狢々と異あり時ハ宋の明帝その王入丁壺小問久く鷓鴣々を形
 似るものぞ看て言さくこの面粗人ハ似て紅赤色なり毛ハ狢狢に似て尾あり。

よく人のぞくものいふ鳥の声の如く生生死のりを知り力千鈞を負ふ足れり。
 及踵めく膝をれば則物不倚人を得れば則先笑く後これを食べり。
 狢人因之竹筒を臂に貫け誘ひてその笑ハ時を俟て速くこれを抽て
 錐りてその唇を釘めく額ハ著れば猛とて必死をその死を候を裂て
 血を取らぬのありその髪ハ甚長りりく頭髮を爪ハ住血ハ鞞及排ハ赤
 え。これを飲ハ人ハ鬼とんんと有とて明帝やかく画工ハ命七その形を
 圖せりあまのく本草集解ハ所見あり今これをんく彼をわりの狢々とんんも
 遠く下さげれ人を啖や死その唇を反して笑めやも正しくんん好と
 人畜の血を吸めりハ素よりその身ハ血あり類を感く嗜するん。
 言精細ハ解諭せ盆九郎ハ歎服のり額ハ推當く感するを半响をかり。
 和殿ハ實よその武藝の技羣なるをば文学中亦蘭也のりも貴名をる

上をぬがれた願ひの名告あけ宿所へ俱く歡ひの盃を勧めんあれた愛との
 後又を只言答て己ざりける。かれども義秀ハ聊あやうあれが終ふその實を
 告むこゝろあひひも死賞美ハゆく分過り某元來安房の浪人浅江小豊六
 といひ親族より妻子もかれが武者修行とせむとて旅より行ふ月日と弥
 月此度ハ越の中國志士ありあれが縁竭せハ再会あべし紫首を喪失
 置土産進らざる免えんとも誅せんとも国法のみあり討ひ免えぬ退えんといひ
 立別れんとしりりく盆九郎ハ袂に携て遠く引留めその酷情を某ハ遺り
 此の莊官なる甲斐の民の害を除れて土地の功ある旅人と下宿も引留ら
 これを労働せむハ後日守護ありん答と蒙れんと疑ひや枉く且く立ち入り
 とりぬく引く故きハ義秀ハ已とをば僅よとの意に任りり却説山盆九郎ハ
 若黨軒松妻二郎亦両三人分付く六箇の賊の首を刻とておのく被ぎて狼の

皮小界りとこれと列卒小昇と又東平と牽立とて義秀と共に麓を下りく
 角鳴村と過ると天はめくと明かりされがきの義秀は留れし酒屋にまハ
 この時既不起せし門の戸を推開てをれが津川の莊官がきのふ家も想せり
 旅人と列卒、騷の後者は罪人を牽しおろしげの獸と狼の皮とりく包も
 早く意氣揚々と還りあり討たす限りもかれが後れる後僕のはり近く
 立向ひく縁由と答れば後僕ハ誇良義秀が衆賊と殺と狒々と殪せし為体と
 言葉せし告ぐあつて呆れて舌と吐れ人見被ふあつて小男やね
 とも被旅人の衆和あるさむの本更おんハ一切あひくはれ暮るふ山を越んと
 といひてのう敷しり禁しとの悔しきとせしめくともろりおれり目送り
 たりま程ハ義秀ハ莊官盆九郎ハ誘引れく舊來し道小立えりふその宅所ハ津川の
 駅あり東へ入ると二町あり下構の衛門あり松柏多れハ里人ホ字しとく

莊官林と呼做しより盆九郎は宿を還るとやぐ義秀と客房は請坐りの
早飯を煮め浴室に入れぬが方々の管待等雨を夜に又盆九郎ハ
諏訪嶺かゝ山賊と狒々を退治し為体を通書写し飛脚に齎し
國府へ遣はる内表平を鞠向せし鐵盾矢藤五が殘賊を討つ外は同類
ありしありし東平が首を刻く彼六級之首に兵を津川の市に集る
狒々の頸に鐵箒貫た添之の猿暴を牌に識し示すか几傳の
陸續と東西より南北より走聚し西三觀者恰堵の如しこれやう義秀が
淺江小豊六と名告る假名も亦高くびやく只管よりの武勇を稱賛せぬ
かゝるがれが又彼狒々の撃漏れ一頭ハ遠く外山へ逃去らん今枝に電
村ある女子の先ともく賊の愚ひも絶えぬ人みぬ安堵の息を
息を慕ふのあり義秀が生祠を祭るのえあるとや

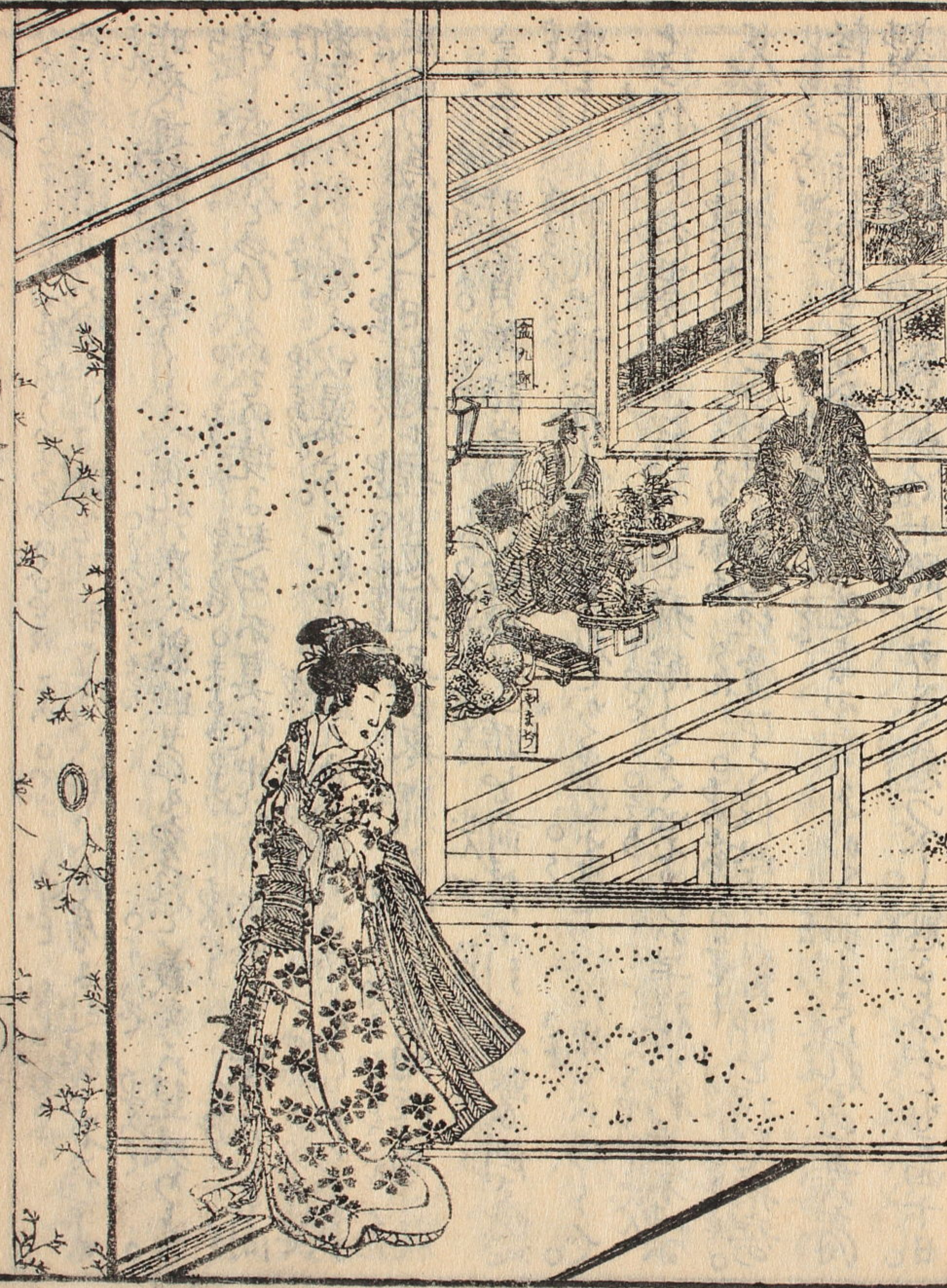
後輯第五

莊官林の淫女
山蛭橋の殘獸

再説莊官山盆九郎ハ妻を奪く喪ひく只むりの女兒ありその名を山路と
呼做する年ハ七七八あやかん片山里は生育ともその才貌醜く母ハ國府の
このありなれば幼稚に筑紫琴を幾組習けん土地は旱多風流女を
り母のなりし後ハ父の寵愛称す佳塔とを擇む田舎ハ人物
質朴あり山路が意は稱するが縁談今不整をこれる不思で運
情とあはれめあり親盆九郎ハ女兒の奸を防ぎを偷兒を御せが如く
深慮し養立く俊蔭が女兒中ハ劣らぬとあひり他話休題盆九郎ハ
義秀を養志せんその宵酒宴の席を閑く小海味小疎山里をさせ
庖丁のあはれも柳葉の年魚の素焼藻伏束射の骨膾を種々酒食の

準備せし東道態大々ありて書院は燭臺を措き義秀と管待共
 奴婢ハハ鉦子と執事もあり配膳は侍らりて賓客を稱する當下
 盆九郎ハ恭しく盃を執りて義秀を勸めくはる浅江ぬし恥づハ滋味珍
 饈はあつねども頭ハ一度過りて某何ハの福ありて飲多し世の豪傑
 値偶の歡びのめりて討とく死山賊異獸の一時は滅せし頃附驥の
 面をかこせり迺亦忠節ハこれにあつて人記録ハ載せし孫に
 傳へて話柄と成べ死の目皆是和殿の賜めればあふ寸志を表はす村
 酒とく嫌はれハ本望をともふ義秀も亦餐膳の謝を述礼を盡し或
 受或ハ投送は浮つ浮られて初献や果と死盆九郎ハ又義秀に
 對ひて某一個の女兒あり山路とを名づけるを松ハ史と筑紫琴
 とき嗜り彼と看よ今一度過りて勸め山路々々と呼ぶハ縁

準備をあらう山路ハ艶妖ハ結髪化粧して綺羅やある夾衣に措落
 たる帯やの字の似く結下て屏風の背ありて親の後方ハ坐を占て且
 義秀と拜しけ當下両箇の婢共筑紫琴を握來て山路がほろハ推居
 且ハ盆九郎ハ茶ハ山路ハ例の一曲とて促せし蓋らひら面
 色やと僅は琴を引くやささるる匣の中あり擇取る假ハと素々細
 や終指ハ細めて調子を試み梅が枝ハ鶯の啼ぶと唄ハ客の客
 あまの咲ハ顔ハ身を傾けたりと獨義秀ハ声色を好むが
 厭く多し心を用ひ管待を辞せんともはるハ中ハハ彈を
 びる王とゆもその一曲の詠とてかて酌席ハ堪むと稱く蓋を
 辞しこれハ盆九郎ハ送憾くあめりて強きやわく山路を建て盃
 盤をとり納めて湯をとりわく程ハ婢共ハ客房ハ臥蓆を布設すと



愛の盆を復す
 女九郎を
 心を以て

つま二郎

つづ。○（義秀の）盆九郎は謝を述べ、（臥房に）起たる客のたゞも
 昨夜通宵睡らざりしうゝ人なれば衆人熟睡せぬもなれば、義秀は翌夙めく
 辞し去らんとあひらぶその曉は起ゆべし、真夜中比より雨降とぞ、且も間
 断多く今朝の風は吹暴らう。これゆかり、盆九郎の頭り小苗りて、（義秀の）
 風雨の為か又一日を過せ程は忽地足は疼痛を覺て左の向脛高腫
 進み、（聊丸を）被られとあひなれど、かゝる患は元は疾とありて、
 そが併懸念せざりしふ、これより苦痛酷しく、心むろりの早れども、歩不便
 せんまを、盆九郎との形勢は驚死憂ひ、彼世より醫師を招きた病癒の
 軽重を訊問ふ、（これを）全く悪獸の送毒ゆかり、かゝるの如し、（されば）その毒は
 浅うり、氣長く保養あり、（十餘日）のち愈つべし、愈むるのせも、（四十日）
 慎むる禁足せられ、筋縮り骨冷く廢人とぞ、（五）人とあんと、（五）人あり、（四）人あり、
 これゆかり、盆九郎は母より醫師を擇む、湯劑膏薬授ふ、（日）毎に
 義秀は勸められ、（五日）のち膿血潰え、（七日）のち瘡痂を生し、（十二日）に
 全く瘡より義秀は総角より、（十日）も病よりなれば、（心）頻に焦燥く、（辭）去
 らんとぞ、（醫師の）言ひ、盆九郎も今こそ、（後）こそ再發せ、（六）月
 且も禁ゆる、（浅）うぬ人の謙意を破れ、（之）のさびら、（下）日ごと、（明）暮り、（又）
 十餘日を経よ、（其）の鼻月雨も稍霽つ、（夏）も半は過り、（これ）あり、（先）小
 盆九郎は義秀は退屈させ、（之）の勢の暇ある毎に、（問）慰む、（之）のや、（或）ハ文
 武を討論し、（之）の日を消せ、（或）ハ江湖の雜談し、（燭）を秉り、（宵）も
 あり、（義）秀ハ性よく、（生）平に言葉寡く、（之）も議論ハ敢讓とぞ、（宏）博
 妙論意外よく、（新）知は、（之）のた、（盆）九郎ハ感服し、（之）を捨て、（之）の

つづ。○（義秀の）盆九郎は謝を述べ、（臥房に）起たる客のたゞも
 昨夜通宵睡らざりしうゝ人なれば衆人熟睡せぬもなれば、義秀は翌夙めく
 辞し去らんとあひらぶその曉は起ゆべし、真夜中比より雨降とぞ、且も間
 断多く今朝の風は吹暴らう。これゆかり、盆九郎の頭り小苗りて、（義秀の）
 風雨の為か又一日を過せ程は忽地足は疼痛を覺て左の向脛高腫
 進み、（聊丸を）被られとあひなれど、かゝる患は元は疾とありて、
 そが併懸念せざりしふ、これより苦痛酷しく、心むろりの早れども、歩不便
 せんまを、盆九郎との形勢は驚死憂ひ、彼世より醫師を招きた病癒の
 軽重を訊問ふ、（これを）全く悪獸の送毒ゆかり、かゝるの如し、（されば）その毒は
 浅うり、氣長く保養あり、（十餘日）のち愈つべし、愈むるのせも、（四十日）
 慎むる禁足せられ、筋縮り骨冷く廢人とぞ、（五）人とあんと、（五）人あり、（四）人あり、
 これゆかり、盆九郎は母より醫師を擇む、湯劑膏薬授ふ、（日）毎に
 義秀は勸められ、（五日）のち膿血潰え、（七日）のち瘡痂を生し、（十二日）に
 全く瘡より義秀は総角より、（十日）も病よりなれば、（心）頻に焦燥く、（辭）去
 らんとぞ、（醫師の）言ひ、盆九郎も今こそ、（後）こそ再發せ、（六）月
 且も禁ゆる、（浅）うぬ人の謙意を破れ、（之）のさびら、（下）日ごと、（明）暮り、（又）
 十餘日を経よ、（其）の鼻月雨も稍霽つ、（夏）も半は過り、（これ）あり、（先）小
 盆九郎は義秀は退屈させ、（之）の勢の暇ある毎に、（問）慰む、（之）のや、（或）ハ文
 武を討論し、（之）の日を消せ、（或）ハ江湖の雜談し、（燭）を秉り、（宵）も
 あり、（義）秀ハ性よく、（生）平に言葉寡く、（之）も議論ハ敢讓とぞ、（宏）博
 妙論意外よく、（新）知は、（之）のた、（盆）九郎ハ感服し、（之）を捨て、（之）の

あり一日其に告ての言究やく卒命とて無礼こととるれん其
 今一條の商量あり寔不奇に縁しをが事不文とて八且誠まうの言
 曩日見参ふ入りし女見山路八年も十八なりやう塔より宛用意
 その人をほめれん今至れ某のころ十餘村の長く其莊園も如此々
 鄙語よひ鳥か里の蝙蝠よ似れも里人亦は尊敬せられて乗馬
 あり耕牛あり奴婢十餘名を役使へ衣食も乏し然るもわが邊鄙の卑
 職と嫌れと山路を和殿の妻と職役所領を譲らんと云ふと先づ
 過易記と白駒の隙に喩ふ血氣を任して旅あり行武者修修あるも
 今泰平此世のあれは武を用る時あり頭ありあふ留りて生涯
 無為を樂とて宿望のありの和殿のありのやと正首相譚
 へハ義秀笑く眉も擡ゆ一所不住の某と云ふと驚くはの言は及ん

と欽之死をあらはれども其性僻不羈の人の塔とて果は人骨
 あり且多く思起と武事修修の爲國郡を遊歴せんと欲せし北國
 極めを況京あり西の四國九州はまを寔は先陰の白駒の隙を
 過る如く尚中途の抑留せられ生涯悔も及びてを置く故置れんと
 遙か東と推辞と聽え推却と和殿の武藝の既を諷訪嶺を目撃
 勇力の携ゆ鐵杖ゆく推量の廻回修修の誰のその
 右の死に相応ぬ婚縁を強く勸るの嗚呼やと某も両刀を身小帯
 の言下口より及び嫌れんと意を盡言と盡之
 この終已まわれの日や送恨を解ん深く深念をいふと其の言
 果は不義秀用とて又他人の厚意を悖るといふ薄情よ似れども匹夫も
 その志を奪えん況大丈夫方のを宰我子首を媒約めりて説く

とも別々呑んぬるもなし。かゝるも乃聴まじい病瘡全く愈せしめられ袖を拂之
 去りてこの餘の尋思のいさよと声高くあはれお随ふ氣色なるをうら
 盆九郎の愁も不覚のうらひのけく悔いたるも腹のうらもさうさ色も頭
 肚裏もあはれこの人實のうら女見と嫌あまあひと且く底意を探りて推辞
 ああわんぢもんあつて一朝一言小緯整ふたあはれせんあんとあひ久あく
 さく難談も紛らうて遂おゆひ強ざるうり却説四山盆九郎のあひ起せし
 縁を推辞まじいお己うらとあはれあまあはれあはれ武邊と旨とくあはれ
 情も疎くとも豈とのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 文治の年間より鎌倉殿の御家臣あはれも村落國府へ遠くあはれあはれあはれ
 かく況親しく鎌倉へあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 文学のこれより家と奥まじいこれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 即座小兼りさうへとの性浮薄あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 かたはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 要あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 武者修徳の志願ありとえ彼人あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 かく山賊異獸と退治して民のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 かく愈えりあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 さあとも降暮と五月の空に癖あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 夏あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 ぢもん今宵よりく宵も毎あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 りて遠く讀んで慰めあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

情も疎くとも豈とのあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 文治の年間より鎌倉殿の御家臣あはれも村落國府へ遠くあはれあはれあはれ
 かく況親しく鎌倉へあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 文学のこれより家と奥まじいこれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 即座小兼りさうへとの性浮薄あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 かたはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 要あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 武者修徳の志願ありとえ彼人あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 かく山賊異獸と退治して民のあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 かく愈えりあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 さあとも降暮と五月の空に癖あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 夏あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 ぢもん今宵よりく宵も毎あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 りて遠く讀んで慰めあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

心せりしをまじくしめしる。兼、山路の初更の比より物の本と携りて客
 房へ赴くと、或の子二つ、或の女三つ、深松退治のついでに、臥房へ入ると、
 此の情由をよくかきと密に、盆九郎の獨笑して、緯も成ぬと、
 謀計を浅くおれ、これを仔細に原れ、山路の親分付のまの宵、毎に義秀が
 慰る状と、久くはあわじ、渠の傍より密夫あり、盆九郎が傭若黨は、軒松
 妻二郎と、ゆるい陸奥の信元晴は、仕へるもの、元晴の戦役と、賊の兵火、
 圓山の館へ、天爐とあり、比妻二郎は、辛く、塾と渡り、團を脱れ、越後の津
 川、落首の由縁の家、に寓居し、一日、そと送り、程小莊官屋敷、ふたりの、
 三、四ヶ月を経る、抑との妻二郎、今、茲二十五歳の、故主の戦役と、
 逃竄れ、るもの、あれが素あり、その人、ありと賞は、
 一七、その進止、賤し、が、且、算筆、人、を、優く、あは、る、め、の、
 家の若黨、且、身の暇を、も、
 かの、ある、日、妻二郎と、と、
 盆九郎、は、
 多、
 山路、も、
 か、抱、
 一、
 肥、
 客、
 語、

義秀ハあまの光景の川弾とせざるはく吐裏小評をくくあいの主人
 盆九郎ハ邊鄙中稀のべに武事も文字も些のあれども取つ不足のい人あり
 渠ハ客と愛はるも又人と識るべくもみか名聞のあつて實の利を
 揣るのあまの裏柔弱ゆく表剛く陽ハ公の陰ハ私多うりさるあり土氏を
 憐れむくわれども公更ハ假托と誅求を少くは且施と好むは似れどその
 性究く鄙吝これを見らんと欲まは先且くこれハ與かと老氏のとふ似た
 事あり。これ頃日その奉勳の意を附くこれと知る。渠賄賂と受給びて足る
 ことぞをこれハ賞罰共正しくはく。愛ハ溺る故ハ國の内におもひ現
 その女兒の淫奔を遠くはて狹危起えさる。今そらふはみ処小抑留
 せられて皆縁さふのひ被られ。いとも恥に死さう。毒瘡既ハ愈くれ。日
 ちつた祭足とくれ。とひ決め。只音ハあつて別を告んと盆九郎と尋す。ふ
 きのあり公使中より之在宿せむとせ。辭せ去らる。心かたは
 又あふ下日二日。送る程ハ五月も下旬ハ終りありて。懲雨晴の天定く。好
 梢ハ朝蟬を鳴く。北國ハ稍暑ハ向りか。程ハ盆九郎ハこの兩三日公
 務ありて家ハ在る。稀われともかひく。謨ハ婚縁の一議ハ要時ハ宵ハ
 忘れ。既ハ果ハ今ハ死比ハある。この日宿所ハ還るとせ。女見
 山路ハ其ハ。又ハ月ハ此彼と誓を擇む。決める。を浅江ハあり。稱ハ
 つん。これもあつて。痕のいもを越く。あまの後をさる。過ハ死よりく
 今宵ハ小豊六と婚姻を執り。いんあられ。彼人ハ小偏屈ハ社仗ハあつて。の
 身の浮浪を取ら。ふの云云と推辞ハせん。かれハ且告。今宵ハ不意ハ
 盃と。結せん。と。おん。その準備ハ風爐ハ浴。化粧ハあつて。下
 日暮ハ物ハ整。祝儀の衣ハ改め。ひとり。彼ハ赴。あつて。慰め。

これへ時分を計りてのほどに箇様々々といふ内祝言のりかれば媒妁のめくも
 ありと後日よ里人を擇ぶるもその人わらん今宵の黄道吉日勿ふ五月と
 せよとけいといふはあつたあつたゆゑと真に多く竊に謀合し山路へこれぞ
 呆れと雲時回答もゆゑに忽地宵の塞りくとうれりく受ども今も推辞
 べくもわらぬ愁の眉を恥死面色は紛りのあむくといふもく領地をわかれ先
 惚子ぞと多むる親をうてを無慚なれさる程は金九郎へ今宵の酒食を塩梅
 見とく且くも厄福を去らば遣使も奴婢共が揃う櫛盒八両あつて神此
 鳴る欵と疑れ敵く青菘へ人の日や七種雜を小似りたるその献立で候へ
 塩甕混布の巻賜これの座著の有や青鷺の吸物小片暮着類のりかひ
 ひ火より加減が肝要ととらふ小世話を焼味噌ハ苦り切る露の葉の刺花と
 雑中と上を下と返り方癖の紛れ小便をゆる山路へ竊ふ妻二郎を物陰か
 招けり今宵のりかひと云云と告て頻もち泣る涙の際よ又のりかひを
 中んが止宿せしと下り座敷の塞りくくわみ夜いよと稀ありに家尊大人お
 云云といわれうらむをわたりより絶ぬ夜毎の枕も夢も覚く浅きや終よ
 脱れぬ今宵の誓烟飽を親を欺たり不孝の罪を重ぬとも身身を棄つ
 捐られ他夫よ添まんや契り一言偽あつたをわかれもいひぬといひは
 又泣沈め妻二郎も歎息しと絆既も急るれ且くも猶豫あつて今宵
 身身をぬく走り追人蒐りて脱とくく共侶は死んのもさへ往方ハ云云
 ありける暗号の箇様々々と其示しと慰れハ山路ハやうゆく涙を飲てくこの
 夜を契り謀合しと別れりかひ山路ハ外視を竊とて日来愛をくも衣を
 いつづつ襪を包むる臂近の沙金流銀十五六両松といふ妻二郎も連り
 妻二郎も亦密々小起りの準備して日の没果をもあつ程よと黄昏のりかひ

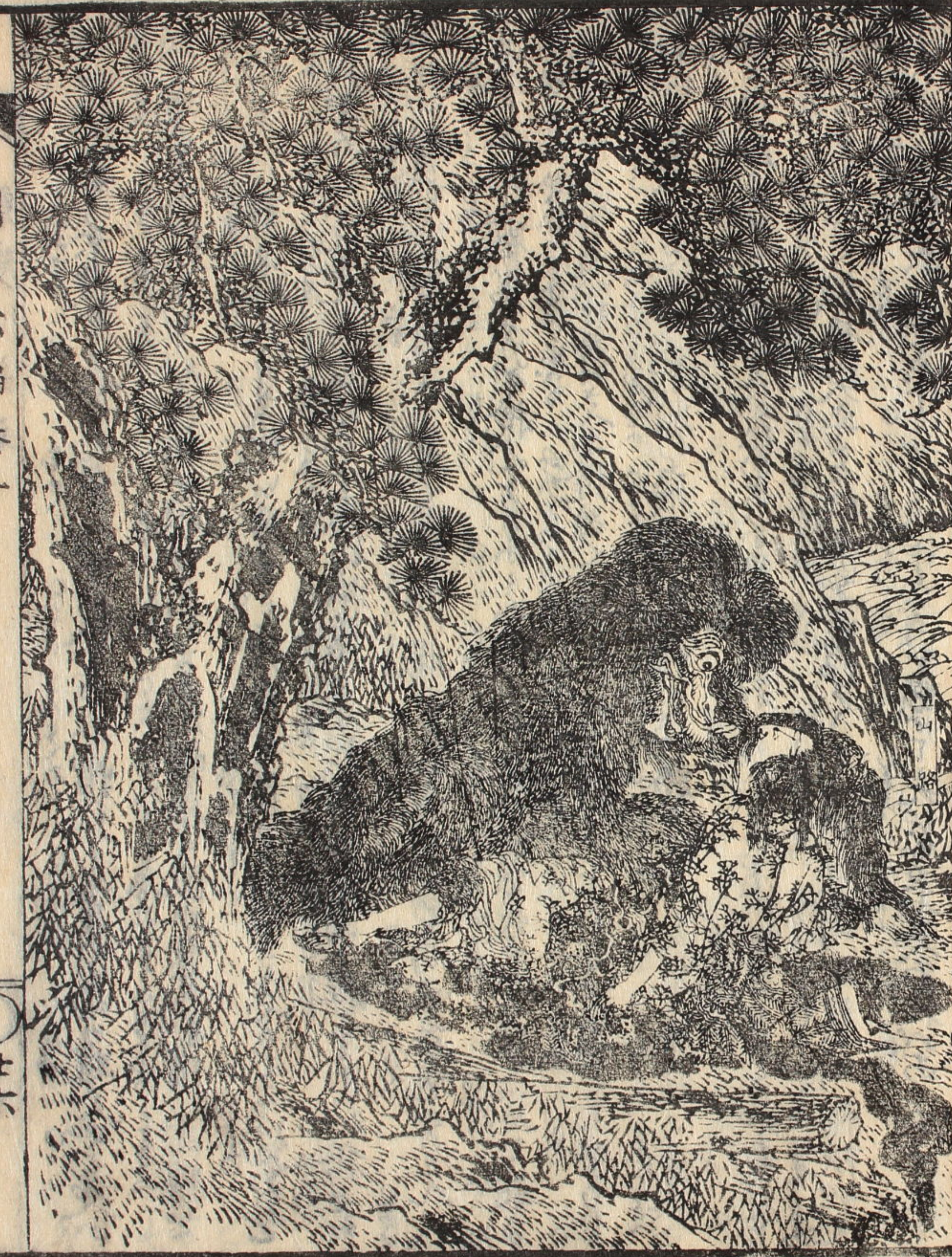
○その死つ事あり。故郷の親同胞もかく親交も或ハ討て或ハ落七う
 なる今更奥の高館へ赴きとも又誰ぞ悪人當國蒲原郡の新泻中を聊相
 識る者あれは且く彼處へ落著て其処より京おれ鎌倉おれ便宜を求め又
 さうに走ら後悔あつた。と云ひ決り山路中も豫て云々と其路費を腰小
 袂包を引提て先とほつた。これハ禰室の壁は掛方一張の半弓あり。妻
 妻二郎又おとろふ。今新泻へ赴く。今新泻へ赴く。今新泻へ赴く。今新泻へ赴く。
 とも追人もあて指まゝ。諏訪嶺ハ難所なり。も路程いと近う。今ハ彼
 山ハ山賊の患もかく猛獸もどつとけども女子をかくゆ。深山賊ハ其究竟の
 物中を追入逼り樹隠れて遠箭おく。射て落さぬ。嗚呼あり。遠く
 件の弓どろわ。蘭の桶前二條を。技平。と。添く。小脇。と。
 と。外面より。俟。山路。暗。號。を。違。へ。庭。門。を。潜。り。妻。二。郎。ハ。透。
 へ。走。り。あ。つ。て。披。扶。け。て。西。北。と。き。て。走。り。有。斯。れ。も。金。九。郎。ハ。時
 移る。と。これ。と。あ。つ。た。夜。初。更。の。比。及。小。饗。膳。を。整。ひ。衣。裳。と
 改。ん。て。納。戸。の。ま。た。と。客。房。と。覗。く。山路。ハ。彼。客。の。居。る。と。豫。て
 論。せ。し。ま。渠。何。処。へ。遭。たり。ん。是。首。致。彼。首。致。と。家。の。内。隈。に。く
 廁。の。戸。ま。て。開。つ。た。影。も。ぬ。え。と。あ。つ。た。と。駭。然。と。猛。子。取。牌。を
 集。合。は。山路。と。あ。つ。た。妻。二。郎。も。何。地。に。た。ん。と。語。り。た。と。備。の
 情。由。と。あ。つ。た。の。あ。つ。た。悪。告。よ。つ。た。と。辨。せ。し。く。必。も。ハ。奴。婢。が。目。と。目。と
 注。し。て。辨。等。し。つ。た。現。さ。つ。た。も。あ。つ。た。の。情。由。と。あ。つ。た。加。梅。娘。と。あ。つ。た。
 密。語。と。あ。つ。た。罪。と。あ。つ。た。の。情。由。と。あ。つ。た。の。情。由。と。あ。つ。た。の。情。由。と。あ。つ。た。
 宵。と。毎。の。客。房。の。賓。客。を。慰。め。と。家。尊。の。仰。を。受。つ。と。宣。ひ。と。侍。り。と。と。
 客。房。へ。た。た。り。と。の。次。の。禰。室。と。妻。二。郎。と。樂。し。け。の。相。譚。と。微。音。と。沖。き。

宵の多かれもこれ情由のあり侍らば。金九郎は果て原山山路の妻二郎が
 誘ひて走りかへん。意無慙や今。衣櫃の引かきしれ失くさる物さ。あんな
 のまご。汝のやを告ぐ。死なれ。賓客。浅江生と塔か。の風望あり。彼人。尚報ねども
 推て婚姻の用意。この種々の献立のま。今宵の儲あり。今。山路を在
 り。と。押頭の礼と。風は奪れ。掌中。の珠と。淵。沈や。心地。も。これ。の。縁の
 趣。と。浅江生。は。だれ。か。これ。亦。何。と。面目。の。く。い。ひ。解。は。辭。あ。ん。や。汝。は。豫。て。さ。う
 さら。う。あり。と。知り。あ。ら。う。され。は。告。ぐ。う。を。越。度。あ。れ。さ。く。は。彼。妻。二。郎。が。故。郷。を
 陸奥の高館。へ。又。富國の新泻。は。由。縁。の。め。あ。り。と。う。い。ひ。あ。れ。投。て。往。方。高。館。致
 新泻の外。あ。へ。う。た。僮僕。們。の。二。隊。小。ま。り。て。西。と。東。へ。追。蒐。よ。り。れ。へ。里。人。と。馳。催
 一。と。諷。訪。嶺。の。う。と。追。ひ。て。ん。意。無。慙。や。と。敷。圍。く。只。管。よ。り。さ。う。立。礼。の。僮僕。は
 あり。の。果。て。あ。く。桿。棒。蕉。火。を。引。提。て。外。面。へ。走。去。り。と。程。も。あ。せ。し。金九郎。は
 竹法螺。取。て。吹。鳴。り。せ。ば。彼。此。あ。る。里。人。お。こ。何。の。ぞ。と。驚。騒。ぎ。を。利。鎌。連。村。へ。提
 引。提。莊。官。林。へ。聚。合。あ。ん。金九郎。の。緋。の。趣。云。云。と。あ。示。し。の。留。守。へ。老。僕。と。婢。共。あ。く
 せ。あ。と。い。ひ。も。訖。ら。び。刀。を。引。提。て。遠。く。と。外。面。へ。出。せ。れ。が。里。人。へ。蕉。火。を。さ。う
 照。ら。し。後。ひ。り。う。され。が。又。義。秀。の。毒。瘡。大。く。愈。し。う。ら。ひ。の。日。あり。金九郎。は。別。を
 告。ん。と。あ。ひ。も。宿。所。に。在。り。の。ひ。が。志。あ。れ。の。家。で。黙。止。せ。し。ふ。昼。あり。あ。る。此。言。を。れ。が
 今。あ。り。發。足。せ。と。あ。と。心。を。う。り。早。れ。と。も。厄。留。の。く。か。人。集。ま。り。新。水。は。暇。多。し。あ。ま
 奴。婢。と。あ。ら。へ。あ。つ。つ。い。だ。況。主。人。の。足。を。あ。は。し。の。鎖。を。も。あ。程。小。の。日。れ。む。か。く。暮。小
 たり。か。と。初。更。の。比。及。み。家。内。猛。小。騷。動。く。あ。ど。が。頻。りに。罵。つ。声。奴。婢。も。問。答。を。れ
 彼。共。小。の。取。り。と。く。ゆ。え。か。び。の。疎。く。耳。苦。し。小。勃。然。と。く。あ。り。あ。う。あ。い。れ
 女。見。山。路。と。あ。ん。が。妻。二。郎。と。う。い。ふ。若。黨。と。逐。電。せ。し。を。豫。て。あ。り。と。も。あ。り。あ。ん。と
 あ。ひ。も。よ。と。驚。く。心。の。あ。ら。ぬ。と。も。金九郎。は。い。と。を。礼。あ。る。女。兒。を。餌。食。ふ。れ。と

釣りく推て今宵婚姻と整んと謀りしを外にばくも堪のれは惠蘭の室に
 入るのいぢづる香く葱韭の園子憩あめを良氣を負はてのふとあしなきて穢れ
 家と知りし今宵もあふ曉えや主人のいぢくめたるりとも速く去る通宵彼高
 嶺を越えんされわが盆九郎の性究やく鄙各へも月来止宿して用ひる
 多かるこれの酬とまされ之の金十兩をうと畏るく田守も老僕を召く
 折のうとて黙止する夏の旅の夜をよされこれの今より辞し去るしわが此
 還のめひあこれ進りてめひ後をひか件の金を送しん身と起えんとて
 老僕ハ言と物と受くあらんやあらんやあらんやあらんやあらんやあらんや
 辭と盡し推制んと欲されも義秀決して田にけり縁頼たち四く
 草鞋の紐ももく結び勢ひ已へるあらんやあらんやあらんやあらんやあらんや
 沙金と受あづりく續松西三束と贈りしバ義秀はその二束と鐵棒と結着
 その一束は火と移るく刀と取て腰に跨へ左も蕉火より照らし右も杖と
 つた立く高嶺を指くと暗路と頻は急だるうさ程は妻二郎の山路を
 扶掖つても黒白も別ぬ臯月暗と辿るくも落延く準備の草燈籠火を
 移し路を照らしてその夜初更の比及より諏訪嶺を攀登りさぬく小足
 弱の夜行へ深山路へ急ぐと動もこれバ推斥さるる九覚て歩むと
 惱る女と慰め又奨め進む男も事かを多ひけれ毛骨立く心ほそささ
 弥やる樹下低く山高く九折の咀道を陟つ降つ幾遍とあく跡ええり息を
 吻吐向して又急がは歩果敢く後挾夜の深くやむく峯上を踰る前面
 よりあふのあふを近くを隨火光よれば人あわん鬼あわん男とも女とも
 定るやをえもさのど達の髪を茶しる面ハ皺く赤黒く身長四尺餘りあふ

せりし限りもなれど避んとひく横路かく退んとひく通る山路はま
 妻二郎の合ふる弓箭もその甲斐なく身を縮しく共侶小樹蔭に寄りか
 程は彼妖怪の遭遭さか山路を号ひと引觸る小脇は楚と引提く峯上と
 北へ走るやん妻二郎の吐嗟と叫ぶ怒り小堪後わたりしあを忘るやん不氣を
 激しくしそく草燈籠を樹の枝小掛置く弓小箭刺くやんとひく腕忽地
 麻痺れてつるもせん志やあら朽と一とと焦燥く帯は燈籠結つるやん
 弓箭を携く何地までも追蒐るやんあれども妖怪の三反をり先かちてあかく
 後方とええりつ徐々と移りぬと追勢んと端々直と走ふ近つたて九折
 勿れお造れが忽地え失ひたり妻二郎の共侶を死せり哭りし情人を妖怪に
 搦獲れてそれの生く何せん余を的に往方と索ゆる生死を告ぐせせんやと
 罵つ狂ひ其処ともあぬ深山とあひ入りて喃山路る娘を頻よその名を

呼被れば彼方中女子の声く避ふま名を呼被るを疑ふもあぬその人
 さそい今を恙ねども復たなごやんと受は心小勇まありあひあけり
 呼被るる声とあぬ慕ひゆげ廿六日の月ゆく夜はあ丑の半にやん辛
 しく近つたる前面は溪河横らるりあや樵夫のまかぬ路ゆく常ゆを獨木
 橋を掛り夏にあの樹の上小山蛭ののたまれが山蛭橋と叫ぶや豫て受
 る甲斐もあく彼妖怪の所為あや橋を彼方引捨られが渡もくもあや
 るとそれ山路の川を隔しや老る松の下に只ひをうつらりそれどもく彼妖
 怪の何地邁え影もせひバ怒り勇ま声とあり立くその橋を投擲する喃と
 ともせ山路のまを招きうち位のまを起し懸てひかひあをのまが
 若松の林ふまをわけくともそれも腰五弦をや竊小抄を指し示しく問く
 ろと泣きり討たる限りもなれど妻二郎の指をまかく抄懸る向られが



よる やまぢ
 夜の山路は
 山路 やまぢ
 命を喪ふ いのちを



朝ある

夕ゆべ

さなはのびらぐ不便なりを食ひの残毒憎む此度への道と受は
怒連むと心煩し早にも橋を被方より引る川幅廣く流水急し劉備の的驢を
借るれば輒く渡らんや。いせ事とていせ事とて件の手前とていせ事とていせ事とて
忘れり是究竟と取揚之水際樹蔭に退却し充雲固る程とあれ佛を
山路が曾前へあぐ口を著て血を吸ひ腸をうめ吹かす高味を堪がらん又
肩を及一の額のあつと掩ふよりふや仰だく笑の処を矢声とけて標と射る
寃違はど額の真中肩を不縫曲て鉄四五寸裏袂を不羽をう通てを穿る
残酷無雙の悪獸も窮所の痛癢を要時めゆ勝も四下は響く苦痛の言も共
仰はふ倒るより義秀のあひのあふ悪獸を射あつても免生さるといふおれんと
受がうを投捨て鐵棒突立々と浅瀬を索ねく川源へ五七町赴けば川幅狭く
ありく文餘も過さるるも水中の背を顯せ大なる石をあれがあらんと

鐵棒を小脇に挟みて岨より石へ石より前岸へ只二飛に跳越之進とゆこと兩三町
をめぐり走り近つて又鐵棒をも佛々の呪を衝推くあつり強く當ればや
忽地頭を突断り秋月光を熱視る曩小撃より一札ありふこを形
大なるあつ方小の牡をりかれの雌雄ありとのひ世の風はも空からとま
一頭を漏せその透感くあひ三三餘日社官村に折田を甲斐へあつた獨
言くと立在む程小前面は夥集合る人あり先づ一人真愛を合一声なりと浅江
ぬ浅江主と鳴かると義秀送かえん月之光と里入る松の火光は粉も
莊官皿山盆九郎が里人おとくおとく當下盆九郎の恥る面色を彼方
小腰を折り面目の小浅江ぬ女児うを知られらんこれ彼を追首んとく
この山中の小舟入り今もあつ事多く仲れ妻三郎を足なれ里人あつ活き
緯の趣を各問し山路を妖怪小捉られる且その横死の為体と報を言くと詰く

此度は終に死絶し山路を横死の哀を返す中もあつたし和殿の某と疎果之欲
 別を告げし夜を犯し復た山を踰りて心づかぬと和殿の心を
 この溪川を渡りて女児の難言を懸けんと願ひし詳し知りて又と人の義秀此言
 擬議せし其の前日より詳し去りてあひかきも和主の在宿稀れり意を
 せし今宵の騒動はくふ忍びを留守せし老僕小思意を示し之止宿醫療の酬
 勿沙金一表を送しりかて炭宅と詳し去り又この山辺に迷ひてを比叢漏
 する佛を射てこの令愛の爲にも難言を返し本意は協今今も是を返さるべしと
 のひけ之棒突きて遣んとせし盆九郎の遠く水際を辨むを抗ぐも侯も浅江の
 和殿が曩日の働に國府より父をわけし鎌倉殿の元下知あり則ち勸賞も越後磨
 衣下襲沙金五十両下されうとて府城より佛れを某も預り置り和殿の
 報さうの女児と婚姻整へ宵小塔牽宗と多し宿所を伴へ枉てこれと

涉り更と声高まるゆれ義秀眼と睜り尾陋之盆九郎女児を餌りしを釣くと
 蓬く計りの事今宵推し暫烟ととうねんと準備せし嫚侮の愚人の奉勸女児の
 横死もこれより與りて況某も賜ひ物を汝が塔牽宗と多し宿所を伴へ枉てこれと
 自ら觸れりその後送し申されし宵小塔牽宗と多し宿所を伴へ枉てこれと
 地て子を養ひて年来民の膏腴とてその方を肥せし悪報とし病瘡かき今まで
 汝とわがとせし因果の道理と感悟と私欲と塞なく民を憐れめ縣小権吏おれは
 猛虎も子を負かて江を渡りて去りしとあり毒鱷の人を捉りしとあり溪水小住とあり
 壁の末均韓愈亦が善政も及ぶとあり或は山賊或は悪獸汝を配下し集合しこれその
 奸詐の招くも天理寔に怖く今さら鳥許の伎人お告る要ありとあり後の世まで
 置土産よも驚きえんも心づかぬ地小抑留せし比聊也やあれ浅江小豊六と名
 告るの養父も象も假名もあつた四月中旬陸奥の役小平泉を火攻りて賊首

經任と誅戮しひう厨川と赴はく五百賊を屠り朝夷三郎平朝臣義秀の身元之を
 友鶴と一妾あれこれの色を愛ふわが邊土の卑職小目とけ人の塔とを
 〇山路の死を又妻三郎と奸夫ありはけり空華をんわらとを志す
 飽ふ不敬言懲して忽地けける深山路の繁たて下は樹隠れて往方もをりたり
 盆元郎の義秀の懋えのまがた豫て不の假名を朝夷なりと初て知しつて驚
 〇呆れ里人共侶は忙然と自送りの天明て流水は梁をこく山路妻三郎ホコを
 狂に八昇の返して懸る萃ぬ盆元郎もこの下に話をさる程は義秀の詰且
 行地よりこの宵の新獲田は宿投り又数十里の路を經く同國の高田建地を云
 〇目と走りの市旅の駈り越ゆる入りの泊澤あり急なる六月の上瀬相若神
 〇を著る畢竟義秀相向許すを後の物語甚麼をよ次巻解分るをを人

朝夷巡鳴記全傳第六編卷之一終

泉岸 思之中村貞纂述

博愛興田頼閣正

頭書 小學作文教授書

全五冊

此書ハ先生曾テ學校巡回ノ際各校生徒ノ進歩推リ作文ノ諸科ニ
 後ルテ其憂ヘ其教授ノ順序ト方法トヲ講究シ其發明スル所ヲ實地
 ニ試ミ其效アル俗文要語活用問答等正誤文俗文復説法等各若クテ
 初卷ノ首ニ掲ゲ次ニ作文教授法ヲ説キ日用短簡文一百餘章ヲ編ス
 次卷ハ首ニ俗語雅文ヲ編ス〇第三卷首ニ作文要字ヲ編ス和辭ヲ掲ゲ
 用(願)方(今)諸(証)文(等)ヲ編ス〇第三卷首ニ作文要字ヲ編ス和辭ヲ掲ゲ
 次(成)方(今)諸(証)文(等)ヲ編ス〇第三卷首ニ作文要字ヲ編ス和辭ヲ掲ゲ
 兩卷論説賛銘題跋傳序祝文而祭文等ノ作例數百ヲ編シ其文ノ種
 類ニ從テ其趣意ト作方トヲ説キ他人ノ文ヲ評スル語數十ヲ掲グ
 但シ毎卷ニ作例及ビ類語ニ假名ヲ以テ訓解ヲ施シ教授且獨字ニ
 〇便スル書ナリ其親切ナルヲ筆紙ニ盡シ難シ四方君子一覽實試以
 テ其言ノ誣ヒガルヲ知り玉ヘ 大阪文室寺町四丁目 前川源七郎敬白

